

幕末明治の写真師列伝 第八十五回 宮下欽 その七

小千谷の入口に当たる雪嶺の芋坂は、峠という地形もあって進軍すれば狙撃されて多大な犠牲が出るのが予想された。そのためここにいる敵を攻めるには、正面から砲撃して突撃するか、側面あるいは敵陣の後方から潜行して突撃するかの方法しかない。

閏4月26日、諸隊は雨の中、先手駅を出発して、芋坂に近い南の真人村まで進軍した。松代藩兵は高田藩、尾州藩の兵と共にさらに進軍する。それにさらに遅れて松本藩兵がいた。松代藩の祐津丈之助率いる五番狙撃隊は諸隊より進み、丘陵より敵陣の砲兵陣地を狙撃する。このため敵はこれに対して激しい砲撃を始めた。これに対して尾州藩の砲兵も直ちに砲撃したのだが、松代藩がその前面に散兵していたため、松代藩兵は前後の砲撃に挟まる形になってしまった。この状況を知った岩村の監軍は、直ちに尾州藩に急報して砲撃を止めさせる。そして松代藩の二番小隊、五番小隊、七番狙撃隊、八番狙撃隊長に命じて、前方の左側面の山へ登らせて、ここより敵の背後に回り込み、敵を攻撃するように命じた。これにより敵は前後より攻撃を受けることになったのだが、敵の砲台は堅固で、その場所も川の断崖や杉林の窪地などにあり、頑強に抵抗した。

信濃川の東を進撃してくる予定の上田藩、須坂藩、六川の兵がなぜか遅れて到着しないため、岩村の監軍は松代藩に命じて、松代藩遊撃隊分隊と一小隊を信濃川の東岸に渡らせて、敵の側面から攻撃させた。二隊は直ちに川の東岸に渡り、敵を銃撃したのだが、距離が遠いため銃弾は届かなかった。この日は正午より戦闘が開始され、すでに6時間近くの激戦が続いていた。

この時、松代藩の大砲がようやく敵の砲壘に命中し始めて、敵に大きな痛手を与え始めた。また、松代藩の祐津丈之助率いる五番狙撃隊も岩壁をよじ登り、敵の背後に出て敵を狙撃したため、敵の戦意も喪失する。本道を進む本隊もそれに呼応して攻撃したため、敵はついに芋坂の砲壘を放棄して、後方の雪峰方向へ敗走し始めた。しかしながら雪峰にも砲壘が築造されており、敵はここで最後の抵抗を行い、大砲、小銃で松代藩に対して攻撃してきた。

監軍の岩村は自ら松代藩六番小隊を指揮して間道より進み、松代藩総括隊長、河原左京初めて五番狙撃隊と遊軍を率いて敵の砲台左側の山林によじ登り、敵の側面より攻撃を行うことにする。先に敵の山背より攻撃していた松代藩の二番、五番小隊と七番、八番狙撃隊はそのまま本道を進み総攻撃を開始して、敵の頑強な砲壘に猛攻撃を行った。その結果、敵も砲壘を残して敗走し始めた。官軍は雪峰の砲台を奪うと、追撃を始め、夕暮れには池の原の新田村まで進んだが、夜になったため追撃を諦めて、この地に布陣することになった。この芋坂、雪峰の戦闘に参加した敵は、会津藩兵と衝鋒隊の兵を合わせた五百数十人であったと謂われている。この戦闘で松代藩は戦死者2名と軽傷者2名を出した。監軍の岩村は松代藩の善戦に対して「天晴れ、天晴れ」と感心したという。

閏4月27日夜、本隊の各隊は池の原村に泊まり、信濃川の右岸を進軍していた松代藩の支隊は真皿の部落に宿営する。

翌28日、本隊と松代藩の支隊は出立して小千谷に向かい合流した。小千谷では会津藩兵などはすでに撤退した後であった。小千谷の町は、東南方面が信濃川に囲まれ、北と西は山地を背にし

た要害の地であったため、ここで敵の抵抗を受けた場合は相当な犠牲が出ると思われていたのだが、敵が撤退した後であったので助かった。また、小千谷町民が会津藩に献金し、抵抗しなかったため、民家は一つも焼かれることがなく、官軍はこの小千谷を無血占領することで、今後の新潟、長岡の攻撃の拠点とすることができた。

高田より以降の作戦としては、二方面から新潟、長岡を攻撃する計画であった。これは高田で海道軍と山道軍に分れて出発し、海道軍は鯨波の桑名軍を攻撃、占拠した後、柏崎に進出する。この柏崎を拠点にして周辺を鎮圧後、出雲崎を攻撃してここを占領し、出雲崎港を確保してより、寺泊を攻撃してこの港も占領確保する。その後、水原に進撃するというものであった。海道軍の指揮は長州藩の三好軍太郎、参謀の山縣も同行していたという。総兵力は薩摩藩の十二小隊(砲三門)、長州藩の十二小隊(砲二門)、加賀藩の二小隊(砲三門)、富山藩の二小隊、高田藩の五小隊の五千名であった。

一方、山道軍は軍監岩村精一郎の指揮により、当初はまず会津軍がいる小出島を攻撃してこれを陥落させた後に小千谷を占領し、ここより信濃川を渡って、東岸の榎峠、朝日山の要地を確保して、妙見を経て長岡城を攻撃するという計画であった。

信濃川に沿った小出島は小千谷の南五里の距離にある町(今の新潟県魚沼市諏訪町1丁目)で、軍事上の重要地点であった。ここは会津藩の預領(あずかりち/あずけち)で、魚沼郡にある会津藩の領地を一括で治めていた陣屋があった。会津藩は越後国内の小千谷と魚沼の小出島に陣屋を構えていた。この陣屋には通常は守衛兵が20名と農民兵60名くらいがいたのだが、この度はこの陣屋を守備するため、会津藩の奉行、町野源之助重安(町野主水)率いる遊撃隊などおよそ300名が布陣していた。この小出島を攻撃するため閏4月24日に松代(まつだい)駅で総隊と別れた薩摩藩、長州藩、飯山藩の部隊は同日に十日町に入り、そのまま敵兵を追って八家嶺を超えて、翌25日に妙見に近い六日町に入りここで陣を取った。26日、松代藩の四番小隊がここに合流する。これらの部隊は27日に魚野川を渡って小出島を攻撃した。

会津藩は白刀を振る肉弾戦が得意で、征討軍もこれに対抗して刀を振るい4時間にも及ぶ白兵戦となった。これにより双方に多くの刀傷による手負いが出た。この激戦に勝利した征討軍は小出島の会津藩陣地を占領し、敗走する会津藩兵の追撃に移る。松代藩兵は命じられて途中から引き返し小出島の守備につく。会津藩兵は小出島の北東方面の山地を越えて徹底していった。

5月2日、小千谷駅に宿陣中の本隊に対して斥候より、会津藩兵400人余りが関原より片貝村に出て、小千谷へ逆襲する準備をしているとの報告があった。この報告に基づいて、各隊に対して直ちに攻撃準備を行い、逆に片貝村に進撃することになった。先鋒は高田藩、二陣が尾州藩、後軍本隊は松代藩の八番狙撃隊、五番小隊、一番大砲隊、二番大砲隊などであった。この時の出発時間はすでに深夜3時頃であったが、下山谷村まで進軍したところ、片貝村の村民が急ぎ来て、敵はすでに片貝村の各所で征討軍の来襲に備えて、厳重な備えをしているとのことであった。

(森重和雄)